大学における禁煙運動と喫煙者率に関する一考察

森安　祐介　（生涯スポーツ学科　学校スポーツコース）
指導教員　中薗　伸二

キーワード；喫煙者率，禁煙活動，ＫＪ法

1．緒言

Ａスポーツ系大学（以下Ａ大学）では開学当初の2003年からキャンパス内における全面禁煙と学生による禁煙に取り組んでいる．しかし，その取り組みとは反対に，大学周辺における喫煙の増加や，学年があがるにつれて喫煙率が上昇している傾向にある．そこで本研究では，キャンパス内全面禁煙という禁煙活動に関して大学生はどのように考えているのか，また，実際にどれくらい喫煙者率が上昇しているのかなどについて質問紙調査を実施し，今後に役立てることを目的とする．

2．研究方法

調査１：A 大学の学生に無記名の自己記入式で実施した質問紙調査により，2003 年～2014 年分の結果を分析した．2014 年の 1～4 年次生の回答数は 1095 名．質問紙は，厚生省(喫煙と健康問題に関する実態調査，1999)などを参考に作成した．また，喫煙者率と禁煙活動の関係性に関する論文を参考データとして検討した．調査 2：「質問 8(2)　A 大学のキャンパス内全面禁煙についてのあなたの感想･意見を自由に書いてください」という質問の自由記述内容について，KJ 法（川喜田，1985）を用い分類・分析した．

3．結果及び考察

過去の男子学生喫煙者率をみたところ，どの年に入学した学生も学年が上がるにつれて喫煙者率は上昇傾向にあることがわかる．一方，年次推移で見てみると減少傾向にある．女子学生の喫煙者率を見たとき，確実に減少傾向があることがわかる．Ａ大学全体としてみても，喫煙者率は減少傾向にあり，キャンパス内全面禁煙などの活動は意味があると考えられる．全面禁煙について，良い取り組みという多くの意見がある．反対意見としては，個人の自由であるや，20 歳になれば喫煙しても良いのではないかなどであった．他にも「学内，周辺を禁煙にするのは良いが喫煙者が多いのも事実であり，全員に周辺で吸わないように取り締まるのは難しい．喫煙所が１つでもあればポイ捨てや苦情は間違いなく減ると思う」との意見もある．つまり，禁煙活動は喫煙者率の減少には効果的であるが，それが新たな問題を生み出すきっかけになっている．

4．まとめ

Ａ大学などでの禁煙活動は，喫煙者率を減少させていることが明確になった．また，Ａ大学での今後の課題として，Ａ大学周辺での喫煙や，それによって引き起こされるタバコのポイ捨てなどの問題解決，喫煙者に対する禁煙サポート体制の環境整備や，喫煙防止教育による喫煙防止強化などが挙げられる．Ａ大学では 10 年以上学内全面禁煙化，学生による禁煙を行っており，結果としても減少傾向にあるが，これには限界があると考えられる．大学内だけではなく，更に行政を含めた禁煙活動，対策などを推進し，大規模な禁煙運動に繋げる必要性が，他大学の取組からも示唆された．

引用参考文献

藤井香　他（2007）大学キャンパスにおける禁煙活動と喫煙率の変化．慶應保健研究．25（1）：83－87.

川喜田二郎（1985）続・発想法．中央公論新社.

小牧　宏一（2010）大学における 5 年間の敷地内全面禁煙化が喫煙率に与える効果．4（11）：1－5.